

令和元年6月26日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02567

研究課題名(和文) ラトビア・イディッシュ文学のポリグロティズムの研究 M・ラズームヌイを中心に

研究課題名(英文) The Study of the Polyglotism of Latvian Yiddish Literature: Through the Analysis of the Life and Works of Mark Razumnyi

研究代表者

ヨコタ村上 孝之 (Yokotamura, Takayuki)

大阪大学・言語文化研究科(言語文化専攻)・准教授

研究者番号：00200270

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：ラトビア共和国のユダヤ系ジャーナリスト、作家、戯作家であるマルク(モイシエ)・ラズームヌイの生涯と文学的活動を総合的に研究した。ラトビア、ロシア、米国の図書館、文書館などに出張を行い、資料の発掘に努め、いくつかの埋もれていた作品を発見した。これらの資料を亡命文学、ディアスポラ文学、ポストコロニアル文学理論の方法に基づき読み解き、彼の文学的世界のユダヤ性を明らかにした。それは、たとえば、民話的語りや、語彙の素朴さ、繰り返しの多い叙述、多言語性などである。また、今までイディッシュ文学史であまり注目されてこなかった、リーガにおけるユダヤ人文学のありようを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ラトビアにおけるユダヤ人文学は現在までほとんど看過されてきており、本研究はそれをイディッシュ文学史上に正しく位置づけた。またその代表的文学者としてとりわけポリグロットの性格の強いマルク・ラズームヌイの作品を研究することによって、文学におけるポリグロティズム、イディッシュ文学のディアスポラ性などに関するいくつかの新しい知見を提出した。これはイディッシュ文学研究、ラトビア文学史、ディアスポラ文学理論、バイリンガリズム理論などに対しての大きな学問的寄与である。またこのような知見は、国際化が進み、多民族・多言語との共生をますます深めている日本文化・社会一般にとっても重要な示唆を与える成果といえる。

研究成果の概要(英文)：This project was to make a comprehensive study of the life and work of the Jewish journalist/writer/playwright, Mark Razumnyi, from Riga, Latvia. Through archival work in libraries and archives in Latvia, Russia, and USA, I have managed to discover a number of hitherto little known materials of him. Applying newest theoretical insights in the fields of the study of diasporic literature, emigre literature, postcolonial literature, I have analyzed these newly discovered materials and made clear some specificities of Jewishness of his literary works (for instance, folkloric narration, simple vocabulary, repetitive style, hidden polyglotism, etc.). By studying Razumnyi, I have also shed light on, and given a proper place to, the important tradition that flourished in Riga (to which little attention had been paid in contrast to Yiddish literature in Lithuania, Ukraine, and so on) within Yiddish literature.

研究分野：比較文学

キーワード：ユダヤ文学 イディッシュ ディアスポラ ラトビア文学 ソビエト文学 ポリグロティズム バイリンガリズム

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

申請者は平成 22-24 年には基盤研究(C)「亡命ユダヤ系ロシア文学の研究」を受け、複数の言語(イディッシュ、英語、ドイツ語、ロシア語など)で創作したユダヤ系文学者の作品を検討した。また平成 25-27 年には基盤研究(C)「ラトビア・ユダヤ人文学の研究 多言語・多文化文学の可能性をめぐって」を受け、ラトビアのユダヤ系ロシア語文学者 A・イメルマニスやM・ラズームヌイら を研究した。これらの研究において申請者は、在外ないし辺境のユダヤ系(ロシア)文学を検討してきたが、これは近年、文芸評論においてますます広い関心を集めている、越境文学、亡命文学、バイリンガル文学などについて考察する試みで、本研究課題もさらにそれを進化・深化させようというものである。

そうした研究・調査の中でもとくに注目してきたのはM・ラズームヌイ(1896年 - 1988年)で、その作品の研究を通じて、ポリグロット性とユダヤ系ロシア文学の関係とその意味を明らかにしてきた。しかし、それらの研究においてはロシア帝国およびソ連の、ロシア語文学に研究の焦点があり、ラズームヌイの研究も、その晩年のロシア語による創作、ないし自己翻訳によるロシア語作品の分析が主な課題であった。ソ連においては第二次大戦以降、ユダヤ人の同化ないし排斥が進み、ユダヤ系文学者はほとんどロシア語でのみ執筆するようになったが、20世紀前半にはイディッシュ文学・演劇は盛んで、極めて重要な文化的意義を持っていた。2015年9月に行った科学研究費「ラトビア・ユダヤ人文学の研究」による外国調査旅行では、リーガのユダヤ文化センターに、イディッシュ語を中心とした、ラズームヌイのアーカイブ資料が、ほとんど研究者の調査を受けず、手つかずに多量に残っていることが判明した。ラズームヌイはイディッシュ劇場(現ユダヤ文化センター)において中心的な活動をしていた戯作家であるから、これらの資料を徹底的に分析・調査すれば、今までほとんどその実態が知られていなかった、ラトビアのユダヤ劇場の状況を究明できる可能性があることが分かった。そして、これらイディッシュ語資料の調査は、ロシア語話者でもあったユダヤ人文学者たちの研究において、極めて重要な意味を持ち、その徹底的な検討が必要である。そのような学術的発見および認識が本研究は構想された。

2. 研究の目的

本研究は、ラトビアの首都リーガにおいて第二次世界大戦まで盛んであったイディッシュ語文学および演劇の活動を、主に中心人物であったM・ラズームヌイの作品と生涯の研究を通じて、明らかにしようというものである。ラトビアのイディッシュ語文学・演劇は極めて盛んで、高い水準にあったにも関わらず、イディッシュ語話者の消滅に伴い、研究上でも完全に忘却されてしまっている。アーカイブ資料の発掘を通じて、史的調査がほとんど未開拓になっている、ラトビア・イディッシュ文学・演劇の歴史とその特性を究明し、また反ユダヤ主義運動の高まりとそれに伴う衰亡の軌跡を発掘し、ロシア帝国およびソ連でユダヤ文化が占めていた位置を、ロシア文化との関係において、文化史的に、また比較文学・文化的に解明する。

3. 研究の方法

ラトビアのイディッシュ演劇 とくにM・ラズームヌイ のテキスト遺産を網羅的に収集する。そのためにリーガ市のユダヤ文化センターのアーカイブを中心に調査するが、テキストが散発的に所蔵されている可能性のある近隣諸国(リトアニア、ポーランド、ロシア、ベラルーシ、ウクライナなど)の図書館、公文書館でも調査する。発見された資料は調査補助者の助けも得つつ、整理し、目録を作り、データベース化する。戯曲テキストや伝記的史料は徹底的に分析・解読し、その特徴を、ドイツ、リトアニア、ポーランドなどのイディッシュ演劇とも比較しつつ、明らかにする。さらには最新の越境文学、語圏横断文学などの理論を創造的に応用しつつ、ロシア語・ラトビア語・イディッシュ語などを往還したラトビア・イディッシュ文学が持っていたポリグロット性を明らかにし、多言語文学理論の新たな知見の獲得を図る。

4. 研究成果

ラトビア共和国のユダヤ系ジャーナリスト、作家、戯作家であるマルク(モイシェ)・ラズームヌイ

(1896-1988)の生涯と文学的活動を総合的に研究した。ラズームヌイはポリグロットの傾向の強いユダヤ人文学者の中でも特にその特徴が強く、イディッシュ、ロシア語、ラトビア語、ドイツ語、英語で執筆・出版した。ロシア語以外の刊行物は入手が難しく、ラトビア中央公立図書館、ラトビア国立公文書館、ロシア公立図書館(とくにその東洋文庫)、ロシア国立図書館、スタンフォード大学図書館、ニューヨーク公立図書館などに出張を行い、閲覧・収集した。伝記的史料に言及されている、英語での出版物を発見することはできなかったが、フランクフルト・ユダヤ新聞をラズームヌイのドイツ滞在期間全部にわたって閲覧することにより、最初に活字にした作品である、ドイツ語の短編小説を発見した。ほかにもイディッシュやラトビア語での著作を多数発掘した。これらの資料は、科研費を用いて購入した亡命文学、ディアスポラ文学、ポストコロニアル文学理論書を消化して習得し、またさらに展開した読みの理論を用いて丁寧に読解し、彼の文学特徴を明らかにし、後述の国際研究集会における成果発表報告や論文集収録の論文の中で報告した。それは、たとえば、イディッシュの作家一般に共通するような民話的語りや、語彙の素朴さ、繰り返しの多い叙述などである。研究ではそのイデオロギー的、ディアスポラ的意味を明らかにした。たとえばそれはイディッシュが国家に保証された言語ではなく、辞書・教科書・古典文学などによって標準化が行われていないためであることをテキストを分析しつつ明らかにした。またラズームヌイは反コスモポリタン運動に際して弾劾され、十年間の収容所生活を経て、文壇に復帰し、そののちは劇作をやめ、イディッシュの掌編小説の執筆に専念し、またそれらをロシア語およびラトビア語に翻訳した。それらのテキストの間の微妙なニュアンスの違いを分析することによって、ソ連におけるユダヤ人の文学的ありようのメカニズムを解明した。とくにロシア語訳における「ユダヤ性」の非常に微妙な抹消が検証された。研究成果は一度の国内学会発表および二つの論文にて発表した。また、2016年には*Policing Literary Theory* (Leiden: Brill)という論集を共編、2018年には*Mothertongue in Modern Japanese Literature and Criticism* (Palgrave)という単著を刊行したが、この二つの本の中でもラズームヌイについての分析・論考が大幅に取り込まれている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計5件)

発表者 ヨコタ村上孝之(研究代表者)「李恢成のサハリン」西日本ロシア東欧研究者集会
2018年3月4日 大阪経済法科大学OUEL研究センター

発表者 ヨコタ村上孝之(研究代表者)“Synchronicity across Historical and Geographical Boundaries in Hideo Levy’s *Summer Travel Diary of Henry Takeshi Lewitsky*.” 国際会議「クロノトポス再訪」ポーランド共和国グディーニア市移民博物館 2017年4月27日.

発表者 ヨコタ村上孝之(研究代表者)“The Diasporic and the Native: The Problematic of the “Mother-tongue” Ideology in Bi/Trilingual ‘Japanese’ Literature.” 国際会議“Connecting the Dots.” オマーン王国スルタン・カブース大学
2016年11月4日4 .

発表者 ヨコタ村上孝之(研究代表者)“English and Cosmopolitanism: Their Significance for the Diasporic Russian-Jewish Literati.” ICELL (International Conference on English Language and Literature 国際英語・英文学会議). アルバニア国ティラナ市ベデル大学 2016年10月24日

発表者 ヨコタ村上孝之(研究代表者)“Translation and Its Complicity with the Ideology of a Native Language.” 国際比較文学大会 ウィーン大学 2016年7月23日

〔図書〕(計3件)

著者(共編著者) ヨコタ村上孝之(研究代表者) “Introduction.” 図書『*Policing Literary Theory*』所収 ライデン市ブリル社 2018年1月 全218+ix頁。1-14頁

著者(共著者) ヨコタ村上孝之(研究代表者) 「コスモポリタニズムの陥穽 ロシアにおける反ユダヤ主義の歴史から」言語文化共同研究プロジェクト 2017 『表象と文化 XIV』大阪大学言語文化研究科 2017年6月 全76頁 71-78頁

著者(共著者) ヨコタ村上孝之(研究代表者) 「翻訳と母語イデオロギーの共犯関係について」『翻訳・翻案と日本文化 テキストの世界展開をめぐる』タシケント タシケント国立東洋学大学 2016年 全144頁 24-28頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。